The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代デザインの統一的基盤 : モホリ=ナギの'biological'をめぐって
Author(s)	渡辺, 眞
Citation	デザイン理論. 1974, 13, p. 46-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53687
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代デザインの統一的基盤
—モホリ＝ナギーの‘biological’をめぐって—

渡　辺　　眞

はじめに

現代デザインは，かってのデザインブームを越えて，その真に依って立つべき基盤を反省すべき時期にある。ウィリアム・モリス以来の近代デザインの理念である“生活のためのデザイン”は，民衆のための安価で良質な製品の生産，確実で多様性豊かな環境の形成，そして種々の芸術造形の現実空間への浸透などによって，実現されてきた。今日，我々の周囲を見渡すならば，もはやデザインされていない物品を見い出すことさえ困難なほどに，デザインは一般的で日常的な事柄になっている。しかし同時に我々は，芸術は単にその表面的形態やスタイルの応用，あるいは作品が現実的空間に置かれるだけでは真に生活空間に浸透したとは言えないということ，安価で良質な製品を生み出す機械的大量生産は経済活動とのかかわりの中で，理想的に規格化された標準形態の生産を目ざすよりもむしろデザインを商品的価値のための付加価値にしてしまっているということ，そして確実で表面的には扱い易い技術的合理的環境はその内包する複雑性の故にそのまま人間的合理的環境になりえていないということ等々を，知らされている。このようにデザインは，かって見い出された諸問題の解決の中から新たにそれまで把握されえなかったものをあらわにし，そこから新たに捉え直されるべき諸状況を生みだした。

このことに関連して，デザインブームによるデザイン概念の流布とその拡張

は肯定・否定の両面を見せている。すなわち一方でいかなる領域においても，そこに計画が存在する限り造形的直観ともいえる創造力が必要であり，その意味でそれは単なる計画ではなくデザインでなければならないという自覚が開かれた。しかし他方これに伴う領域，方法論の多様化は，デザイン固有の自立性を見失う危険をもたらした。

“生活のためのデザイン”は，今日では新たな意味での人間性の回復ということになるが，現代はその方法論において種々の方向が見られる。デザインにおいては，科学技術的合理性をいっそう追求しようとするもの，人間の非合理的な面に目を向けようとするもの，具体的日常的な人間性に原理を求めようとするもの，そして伝統的風土的なものにその規範・範例を求めようとするものなど種々様々である。さらに人間工学，社会学あるいは文化人類学などからの思想的，文明批評的，方法論的なさまざまな提言がある。これらはそれぞれにデザイン領域で追求される価値を有すると言えるが，反面そこにはデザインにとっての根本的危険すなわちデザインが独自の地平を見失う危険が潜んでいる。この危険を避けるためには，当然これら多様なるものを相互に比較し，吟味し，関連づけ，そして評価しうるためのデザイン固有の統一的基盤を見い出さねばならないであろう。

ところで近代デザインがその歴史的過程において見逃していたものはなかっただろうか。その理念が“生活のためのデザイン”であるが故に，生活については種々に探究されてきた。しかし生活についてもなお多くの問題を残しているが，最も重大な見逃しは生活の主体である生活者の問題である。この問題は今日“ユーザーのためのデザイン”というテーマに漠然とではあるが捉えられ始めている。これまでは民衆，大衆あるいは消費者という概念によって生活者が扱われ，デザインの出発点は常に芸術や技術あるいは経済的要請の問題からであり，生活者はデザイナーの理想的解決形態の可能的受け手であるかそれとも販売対象としての消費者でしかなかった。このようなデザイナー側の一方的

な想定や規定によっては，“生活のためのデザイン”あるいは“ユーザーのためのデザイン”という理念は実現されえない。なぜなら生活者あるいはユーザーとは現実的な存在であり，デザイン作品は，彼らの現実的生活の中で，究極的には評価されねばならないからである。確かに生活にはさまざまな可能的契機（未来や理想）が含まれている。しかしそれは現実生活の外にあるのではなく，現実的日常生活の中から現われてくるものである。それ故現代デザインがそれ固有の統一的基盤を見い出す場合，この生活者の問題は最も中心的なものの一つなのであり，またデザインが生活者と具体的日常生活において出会うが故に，それはデザイン固有の問題なのである。

この小論は，この問題について一歩踏み出すべく，モホリ＝ナギーの“biological”という概念を吟味しようとするものである。

1．モホリ＝ナギーにおける生活者の問題

モホリ＝ナギー（László Moholy-Nagy 1895－1946）は，生活者の問題について直接論じてはいない。しかし，彼の造形，教育，理論等における諸活動において，具体的存在としての人間の本来性への深い信頼がそれらの基底を形成しており，そこから生活者についての問題が，彼の諸活動の中に見い出されるのである。

ところで彼は1923年グロウピウスによってバウハウスに招聘され，デザイン史に登場するのであるが，それ以前から彼は構成主義的造形を通じて生活革命を目ざしていた。構成主義は，ガボー（Naum Gabo 1890—）の作品に明らかなように，種々の新たな素材を駆使しつつ，周囲空間と作品の相互浸透的関係を目ざす抽象造形活動である。この相互浸透性は，造形活動そのものにまで拡張されるとき，生活行為あるいは生活革命と造形活動の不可分な相互作用的関係となり，造形変革はその構成を通じて生活形成となるという主張に至る。ここにナギーの造形上の立場が構成主義であることの理由がある。1922年 雑 誌

「MA」に掲載された論文の中で，「構成主義とは視覚の社会主義である」[1] と述べ造形における構成主義の変革的意義を強調し，「新しい大衆社会は偽りなき基礎的なものを必要とするが故に，構成主義を必要とする」[2] というように，この造形の変革が生活革命にとっての必須の要因であることを確認し，彼の造形が生活者に向けられていることを主張している。この主張の根底にあるのは，造形的表現に対する人間の根源的欲求の認識である。現代状況について言われる「人間の構成的諸能力を十分に駆使することに対する我々の欲求を認識すること以上に緊急な問題はない」[3] という文章からも，そのことは明らかである。このように彼の造形は，観照者に対する関係においてではなく，生活者としての人間そのものの立場において考えられているところに，造形の新たな意味づけと生活者の真の問題が見い出されるのである。

さらにデザインを考える上で重要な契機である技術に関して言えば，そこでも人間存在との深いかかわりの中で技術が捉えられている。彼が楽観的なほどに積極的に技術とその進歩を肯定していることはよく知られている。しかしそれは彼が技術の持つ人間生活にとっての積極的意義を見ているからである。たとえば，人口問題と生産力における近代技術の意義，生活様式における階級性の打破に対する大量生産の意義，確実で豊かな生活環境の実現にとっての工学技術の意義，そして新しい素材や装置の造形的に豊かな可能性等々を彼は明確に認識していた。確かに彼が技術にかかわる否定的側面をあまり見ていないという点に問題が残るが，しかし彼は技術的進歩に憧れ，それに生活革命を託すのではなく，技術の造形的可能性を通じてみずから新たな生活の次元と意味を創り出そうとする実践的態度において技術とその進歩を肯定しているのである。当然「我々はめまぐるしいほどの技術的生産の過程の複雑さによってあざむかれてはならない，我々の生活の健全な設計に関する主目的にとりくまねばならない」[4] というように，技術の目的が人間生活にあることを認識していたのである。

このように彼の活動が人間に向けられていることは，彼がデザイン教育にたずさわる時，最も明らかとなる。彼のデザイン教育の目標は，デザイナーが全人的人間に成長することである。すなわち現実的なデザイン問題の解決のための技術教育ではなく，又特異な才能の助長でもなく，知的感性的諸能力が有機的全体的に発達したデザイナーの育成である。

以上のことは「未来は全人的人間を必要とする」[5] という彼の根本的思想に要約されよう。重要なことは，これが造形のための理論的装備ではなく，彼の活動がそれに支えられつつ，その実現に向かっているということである。

2．'biological なもの'

(1) biological という概念

モホリ＝ナギーの考えている全人的人間（whole man）とは，人間が本来的に具有している諸能力が相互に有機的にバランスよく発達し，生活においてそのどれにも片寄ることなく，すべてが十全に発揮されるような，そういう人間である。彼はある意味でその理想的な姿を未開人や子供の生活に見ているのである。その場合彼等が文明や社会的諸影響を受けていないが故にそうであると考えられているのであるから，少なくとも人間には生来的に諸能力を有機的に統括するなにかが内在していると考えねばならない。そしてこのなにかがモホリ＝ナギーにおいて，'biological' という語で表現されているものである。この語について『The new vision』の中で，「この書において，'biological' という語は，一般に有機的発展を保証する生の法則を意味している。……基本的な biological な諸要求は非常に単純である。それらは変化するであろうし，あるいは社会的，技術的過程によって変形されるかもしれない」[6]，それ故 biological なものが十全に機能するように配慮されねばならない，と述べている。ところが 'biological なもの' についての直接的記述は彼の諸著作の中でもこれだけしか見い出されない。従って我々が一般に本能，本性あるいは無条件反

射などとして考えているのと同じような内容しかこの語には含まれていないと考えられないことはない。

しかし「色彩と明度の純粋に内的な諸関係，……すなわち宇宙的（普遍的）な体系の構成は風土や民族，気質，教育とは無関係に，biological laws に基づく」。[7] 「biological functions の未だ知られていない領域に透徹し，工業社会の新しい次元を探究し，そして新たな諸発見を情緒的（emotional）な方向づけに移し入れることが，今日芸術家の義務である」。[8] また諸芸術主義に関して，「……観者は，まず最初に自己の生活の中にあって支配的な biological principle に精通すること，そして社会的拘束にもかかわらず，その本来のあり方をさせるように努めることを学ばねばならない」。[9] このように‘biological なもの’は，法則（laws），欲求（needs），機能（functions）あるいは原理（principle）として探究されねばならないものである。つまり人間に本来的に内在する欲求や機能を知り，それらを統括する諸法則を理解し，そしてそれによって芸術的あるいはデザイン的造形の創造のための原理を把握するというような，まさに包括的な意味を持つのがこの‘biological’という概念なのである。

(2) ‘biological なもの’の問題点

上述のように包括的で中心的な‘biological’という概念も具体的にはどのような内容を意味するのか，そしてその理解がどのような意味で造形あるいはデザインの理論的原理となり，しかも方法論的にはどのような指針をもたらすか，等々が問題にされねば，有意義な概念とはなりえない。その場合モホリ＝ナギーは一方で科学的客観性への要請から，精神物理学的なアプローチを考えている。彼がデザイン教育で強調する感覚訓練の意義は，触覚的体験に内在する造形表現上の可能性の開発にあるが，他面彼はそこにおいて構成素材が持つ物理的特性以外に，人間に対する生理的心理的効果の客観的測定の可能性を考

えているのである。精神物理学とは，種々の精神物理学的測定法を用いて，感覚や知覚に関する事実および法則の探究を企てる，つまり物理的刺激（音，光，温度，圧力等）と人間の反応との間にある因果的な関係法則を確立しようとするものである。従ってもしこれが実現されたならば，デザインにおいても望ましき効果を得ようとする場合の客観的原理となりうるであろうし，また造形要素をより客観的に扱うことも可能となろう。モホリ＝ナギーが精神物理学あるいは一般に実証的精神科学に望むのは，このことである。すなわち我々は，一方で‘biological なもの’について，このような言わゆる要素主義的アプローチから，その具体的内容を考えていくことができよう。なぜ要素主義的であるかと言えば，これは基本的には，種々の複雑な事象を単純な要素に分解し，それを事実として実証的に確定し，複雑なものはそれら要素の複合体として扱おうとする立場だからである。この立場は二様にデザイン実践に関係する。第一はデザインに関する種々の客観的事実を提供すること，第二は探究の方法そのものがデザインに応用されることである。つまりデザインにおいてもデザイン問題を要素的なものに解体し，それらを必要条件として，問題解決がなされるという立場がある。

しかしながらこのアプローチには問題がある。第一にこれによって提供される事実はあくまで消極的条件であって，実践を方向づけうるほどの積極的なものではない。また方法論的にも，操作自体は客観的であると言えるが，解決されるべき問題が物と人間の関係である限り，逆に客観的であろうとすることに問題が生じてくる。というのは要素主義的な立場にあっては，全体としての人間とは，単に複雑なものと言われるだけで，真にそれに到達することは常に将来の問題として残されたままなのである。ただしこのことはある意味で全体論的立場についても言えることなのであり，今日の精神諸科学が厳密科学たろうとするところから必然的に結果するものである。ある行動科学者によれば，精神科学についても次のように言われる，「科学の目的は，個人的好みとか偏見

を離れた客観的な方法で収集した経験的証拠によって立証した人間行動についての一般法則を確立することであります。この証拠については別に関心をもつある学者が信拠性を確かめることができ，また方法手続については，何人も検討し再び試みることが許されていなければなりません」。[10] ここから当然現代では事実を数量化し，法則の数式による公式化が最適の手段として選ばれることになる。その結果は事象の数式による表現と説明であり，事実の持つ価値的意味は統計的頻度に置き換えられることになる。

ところでモホリ＝ナギーも，一方で造形やデザイン活動において客観的科学的事実を重視しながらも，創造に対する科学技術の限界を認識している。造形要素に関して，「効果的な統一の有機的な関係の構築は，それ故人間自身の能力にまかせられねばならない。すなわち諸要素の利用の仕方は，社会的－biological な必要によってのみ方向づけられうる」[11] とし，要素についての科学的知識は，あくまで創造にとっては補助的なものであると述べている。従ってデザインにおいて最終的には人間の直観が必要であるとしている。要するに要素主義的立場からは，個々の現実的なデザイン問題の解決に必要な客観的事実は提供されるが，生活者を全体として問題にするための明確な方向性は与えられない。ここには重大な問題が潜んでいるが，そのことは，‘biological なもの’へのアプローチの第二のあり方である全体論的立場について考えるならばより明らかとなろう。

全体論的立場は，それまでの刺激と反応を一対一的な因果関係によっては説明しえない事実の発見に始まる。たとえばゲシュタルト心理学の言う図(figure)と地（ground）の関係の事実がそれである。つまり知覚においては，ある図形がそれを構成する刺激の集まりからそれとして知覚されるのではなく，その背景としての地との関係において図形が知覚されるのである。このような事実から，部分の総和以上のある全体こそ問題とすべきだという自覚が生まれ，ゲシュタルトや体制化（organization）がその研究対象になったのである。しかし

ゲシュタルト心理学は，生理的組織内に物理学的現象である荷電の場と同様な過程を考え，それと心理学的現象としてのゲシュタルトを関係させていこうとする傾向から，人間全体の問題に進むよりは個々のゲシュタルト特に知覚現象のゲシュタルトのみを問題とするようになった。それに対しドイツの神経病理学者K．ゴールドシュタインは，初めから人間をその全体として観察対象とし，平均的興奮状態という生体固有の平衡状態を考え，人間の全体的体制化をそれによって表現している。それによれば人間の反応や行動は，刺激によって乱された状態をもとの平衡状態に回帰させるために発動するものとされる。つまり我々が観察する反応や行動は，身体全体の体制化の外的現われだということである。しかしながら人間を全体として考える場合に真に問題になるのは，人間が示す自発性である。自発性の問題は，第一に外的要因から予測できない行動や反応の生起に関するものである。ただし行動や反応の次元ではなお外的条件と結果である行動との間に媒介的なものとしてブラック・ボックスを想定し，条件と結果の統計確率的相関関係によって，ブラック・ボックスを表現することが可能である。そうすれば自発性に関係する個々の不確定要因も統計的に相殺されて関数的表現の障害にならなくなる。つまり自発性を問題とすることなく人間行動が扱えるということである。ところが人間の生長にかかわる自発性の問題はそうはゆかない。生物一般においてはその種に固有の形態的特徴の実現すなわち成体となることが，その成長の到達点と見なされる。それに対して人間においては，身体的生長の生理学的成熟において，その生長が完了するとは容易に結論できない。いわゆる心の問題がなお残されている。知的人格的側面における発達を生長の問題から切り離すことはできないであろう。もし我々人間が予定された心身的到達点に必然的に到るというのであれば，自発性は問題になりえない。しかし人間は未知の領域を求めて探究していく。これは創造にも関係する。探究や創造における偶然の作用は無視しえないが，探究や創造への意志，その成果の新たな意味の見い出しは，まさしく自発性にかかわると

言えよう。ここですでに気づかれていると思うが，問題はもはや生理学や生物学を超え，社会，文化，歴史の領域に踏み込んでいる。自然科学的に言えば，このことは検証しえない形而上学的領域に踏み込む危険を持たらすと言えるが，しかし人間をその全体として把握しようとする時，これらの領域は不可避的なものである。我々の行動が明らかに意味づけによって支配されるのは，これらの領域においてである。多くの全体論的立場の研究者が，事実の実証を超えてその理論に社会的，文化的，世界観的な問題を含めるのは，上述のようなことを避けえないからである。従ってそこでなお科学性を欲する時，統一科学という理念が生まれることになる。そしてそうなる時，全体としての人間とは，科学が統一されるための方向を与える理念であり，単に法則化され説明される対象以上のものとなるのである。

さてこのように見てくるならば，「'biological' は，人間の有機的発展を保証する生の法則である」というモホリ＝ナギーの定義は，人間の全体的理解における最も中心的な問題を捉えていたことが理解される。しかし彼が生あるいは生活の有機性を幼児や未開人に求めたようには簡単な問題ではない。なぜなら生物学者ベルタランフィ（Ludwig von Bertalanffy, 1901－1972）によれば，生物一般あるいは人間においても，外的諸条件に依るだけでなく，身体内部に最初は有機的全体的であったものが徐々に機能分化してゆき，極端に言えば機械になりうるような傾向をその生長の過程に含むからである。従っていわゆる成人に期待される生の有機性を単純に幼児の有機性と同一視することはできない。モホリ＝ナギーが知性と感性の綜合を唱える時，その綜合性は，すでにあるなにものかに発見されるのか，あるいはこれから形成実現されねばならないものかは，容易には決定しえない。行動の構造という観点から心身問題を統一的，批判的に論じたフランスの哲学者メルロ＝ポンティーが行動の構造に物理的秩序，生命的秩序，精神的秩序という３つの階層を区別するに至り，結局人間はすでにある構造を超出し新たな構造を作り出すという超出への志向

性にこそその本質を有すると述べた。そこから考えるならば，人間存在の生における有機性はすでに存在するのではなく，ある意味で常に未来にあり，それに向うところに有機性があるとも言えるのである。

以上のことから我々は一つの困難に直面していることに気づく。それは“biological なもの”を完全には科学的探究の諸成果に求めえないということである。なぜなら人間の全体性とは，要素論的あるいは全体論的立場にしろ，少なくとも現代の科学においてもなおその究極目標でしかないからである。要素論的立場はその厳密な実証性からむしろ個別的事実の確証に向うし，全体論的立場においては全体性を目ざすにしても，探究の出発点は現象の観察に始まり最初には漠然と把握された全体的なるものが徐々に明確にされていくという過程を進み，現代なおその認識は不完全である。さらに全体論的立場から明らかになったことは，全体としての人間はもはや個別科学では完全に対象化しえず，統一科学が望まれ，おそらく哲学さえ要請されることである。それ故デザインにおいて生活を真にその全体性において問題にしようとすれば，それは他の領域に求められるのではなく，むしろデザイン固有の全体的人間の見い出しを探究し，それによって統一科学に加わるということ以外に残された途はないと言えよう。

3．モホリ＝ナギーの造形

(1) 実践的理念としての“biological なもの”と造形

先の考察に関連して言えば，デザインの本来的あり方がその実践性にあることを考えるならば，まず必要なことは‘biological なもの’を理論的理念としてよりも実践的理念としてその意義を理解することである。そしてその出発点は生活者にある。メルロ＝ポンティーの言う超出への志向性をこの生活者において捉え直せば，それは生活革新への志向性と言えよう。この生活革新について言えば，科学技術的な次元において種々の変革がなされてきたことは，モホ

リ＝ナギーの指摘に依らなくとも一般に了解される。しかも科学技術は絶えず進歩しつつあるという事実が見逃されてはならない。それに対して生活における情緒的側面はどうであろうか。確かに我々は現代芸術の展開やデザインを媒介として現代的環境の中で新たな情緒的体験を受容してきた。しかし問題は科学技術の個々の成果にではなく，まさにその進歩に対応し得ているかどうかである。芸術と技術の綜合とはバウハウス以来のデザインの理念であったが，科学技術にとって進歩とはその本質から帰結してくるものであり，それに対する芸術あるいは造形一般に発展性がなければ真の両者の綜合はあり得ないであろう。その場合さらに重要なことは，科学技術はその歴史的結果としての進歩ではなく，その個々の探究の手続や方法に発展への契機を内含しているということである。従って造形にとっても必要とされるのは造形史に見られる発展ではなく，デザイン実践そのものに発展への必然的契機を含むことである。一般にデザインが流行現象であるとか，個性的あるいは無意識的直観の問題に帰せられている限りではこのことは望み得ない。ここにまず造形の継続的発展についての自覚的契機が必要となる。“biological なもの”の実践的理念としての意義もこのことに関係がある。ともあれこの問題についてもその鍵はモホリ＝ナギーの造形活動のあり方に見い出される。

(2) モホリ＝ナギーの造形活動

彼の造形活動における第一の特徴は，その造形分野の多面性にもかかわらず，それぞれが孤立せず，またある分野が主となり他が付随的になってはいないことである。絵画，彫刻，写真，映画，動的彫刻等々，一般にはそれぞれ別々の芸術ジャンルを構成するものが彼においては内的に連関している。それはたとえば絵画において見い出された造形上の問題が他の領域で展開され，再び絵画に新たな造形的な見い出しを与えるというようにである。このことは彼の造形作品においても気づかれることであるが，事実その著書の中でも述べている。

彼の造形に対する考えに造形の歴史的展開がある。たとえば静止的造形から動的造形へ，彫刻発展の五段階，絵具から光へ等々。しかしこのことは造形の不可逆的歴史性と考えられてはならない。むしろそれらは造形的問題の必然的な展開の結果であり，たとえば一切の造形が動的彫刻に集約されるということは意味していない。大切なことはそれぞれの造形が他の造形に新たな展開の可能性を与えるかどうかということである。それは各造形分野が互いに等価的に担われることを意味し，そこから同一テーマが多面的に扱われ，相互に比較可能となり，また変換可能にもなるのである。

ところでこのようなあり方において，彼は自然的経験対象や宗教的，倫理的，超越的な観念内容を造形の根拠にしないから，まず彼自身の内的必然性がその根拠とならねばならない。彼の造形は抽象造形であり，そこにおいてさらに彼は普遍性を求めて個性的なタッチや作風をも否定するから，この内的必然性はもはや彼自身の特殊性を超へ，個別的存在であるすべての人間に共通に内在する普遍的な人間性すなわち‘biological なもの’ということになる。20世紀の抽象芸術は，それまでの芸術を越えようとするところから，かっての芸術観やその根拠を否定し，造形のリアリティーに対する新たな根拠を求めた。あるときは音楽や数学の抽象性にその範例が求められたり，あるときには哲学的究極概念に求められた。それに対しモホリ＝ナギーが具体的人間の本来性にその根拠を求めたところに彼の現代的意義がある。この具体的人間の本来性を表現しているのが‘biological’という概念にほかならないのであり，それが探究の目標であると同時に造形活動の支えにもなっているところに，その実践的理念性がまず認められる。

しかし単に自己の造形が‘biological なもの’に従っていると言明するだけでは，なお恣意的な主観性を実質的に離脱することはできない。従って表現活動において，この恣意性をできるだけ抑え，より純粋に普遍的人間性に従うためには，なおそれを可能にする別の契機が必要である。考えられる一つの契機

は抽象造形の歴史が示す造形要素の基本的なものへの還元である。このことはモホリ＝ナギーの造形にも一時期見い出される。しかしモンドリアンの水平・垂直線そして3原色による構成，マーレヴィッチの絶対絵画のようには，彼はその要素に厳しい制限を課したことはなかった。要素の還元は確かに個性を離脱せしめるが，同時に造形の豊かな可能性を奪う。従ってこのような厳しい立場は，具体的人間性にその根拠を置くモホリ＝ナギーにとってはやはり受け入れ難いものである。彼の造形の目的は，普遍的客観的な作品というよりも，むしろ個々の作品の普遍性を保証せしめる新たな視覚法則の確立である。それは言い換えれば‘biological なもの’に従う造形法則の確立であるが，我々 は‘biological なもの’を明確には認識していないから，視覚法則の確立とは同時に造形における‘biological なもの’の探究という意味を帯びる。つまり前節でも明らかになったように，ここでは普遍的なものから特殊なものの演繹は不可能であり，特殊的なものとしての造形活動から普遍的なものとしての‘biological なもの’をいかに実現していくかということが問題なのである。ただしそれは作品が普遍的なものを象徴するとか，あるいは観照において直観されるということではなく，丁度科学が経験的観察から徐々に客観的普遍的な法則やその方法を確立してきたように，個々の造形活動の展開の中から形成されていくようなものでなければならない。

それではこのようなことを可能にする契機は何であろうか。そこで我々は再び気づくのであるが，モホリ＝ナギーの造形活動には，それらを中心にして造形が展開しているところの造形的観念とでも名づけうるものが存在する。たとえば透明性（transparency），運動（motion），反射（reflection），空間・時間（space-time），光（light），同時性（simultaneity），多視点性（multiple view）などである。これらの観念は彼がその造形活動の中から見い出し，逆に彼の造形の展開を可能にしたものである。これらはその概念性から言えば，道徳や宗教的価値を示す概念でもなければ，優美，崇高，滑稽などの美学的範疇

概念に類するものでもない。むしろ自然科学的概念に近い。そしてそれらが意味するものは，我々が現代生活の新たな次元において体験しうるし，また現に体験しているものでもある。なぜそれらが重要な意味をもつかと言えば，その意味するところが静止的実体でなく，より動的な関係だからであり，又表現内容あるいは表現対象というよりも操作的なものだからである。ただしここには特に関係的に見るあるいは扱うというモホリ＝ナギー自身の態度が前提されていることは言うまでもない。構成主義的立場では要素の関係づけが造形活動の焦点であるし，デザインにおいても彼は seeing everything in relationship ということを唱えている。さらに私がここでその操作性を取り上げるのは，造形における関係については，‘関係づける’という能動性が強調されねばならないからである。たとえば透明性や反射について言えば，その造形はある媒介的なもの（透明体や反射体）を操作することによって，見慣れた対象を変化せしめ，その別の側面をあらわにさせる。また同時性や多視点性の場合には，ある関係を媒介的なものとして投入，操作することによって，造形の新たな可能性が探ぐられるのである。そしてこの行為のプロセスが重要な意義を持っている。第一に結果としての作品は，この媒介的なものの操作という行為との関係で評価されうる。第二に造形的観念がそのイメージによってでなく，操作性を通じて他の人々と共有されうる。最後にこのプロセスが自覚されるとき，はじめて造形における実験の意味が理解されたことになるからである。なぜなら元来実験とは，あえて自然を歪めることによって，その隠された法則を知ろうとする行為であり，結果は，設定された条件との関係において意味づけられるものだからである。

以上のことが，モホリ＝ナギーの造形に見い出される第二の契機の意味するものである。そこにおける客観的普遍性の契機とは，個々の作品の中に理解されるというよりも，むしろ上述の第二の操作の共有性にかかわっている。つまりここには作品の成立の必然性よりも，誰にでも，その操作を理解することに

よって新たな造形行為が可能であるという意味における普遍性が開かれるのである。さらに言えば，それが人間の主体内の機能連関さらには，この関係を正常に保ち得る社会構造上の関係を重視するモホリ＝ナギーの立場から当然要請される造形の社会性である。最後にこの章で問題にしていた造形の継続的発展は，上述のように，現代生活の新たな次元にかかわる観念を，その関係性と操作性を通じて造形的観念として造形すること，そしてその操作性を社会的に共有することによって可能となるであろう。

4．デザインの統一的基盤を求めて

これまでデザインの領域における生活者は，デザインされるべき製品との関係において，つまり製品の機能に対する人間の関係において考えられるのが常であった。消費者に代ってユーザーと言われる場合でも，それは製品の使用機能に対して現われてくる生活者の一側面を語っていることが多い。この面においては，現代の諸科学が多くの事実を提供しているし，またデザイン活動において作品の使用性（種々の身体的動作の平均値）や経済性（市場調査による大衆の好みの統計値）の領域ではそれらが有効であることも認められている。しかしこれでは生活者は常に我々が製品に関連して個々に把握し得た機能に限定されたままである。それに対し生活者そのものに目を向けるならば，孤立化された個々の生活機能よりも，全体としての生活者においてそれらがどのような意義を担っているのかが，より切迫した問題なのである。ここから我々は，生活者の基盤である人間存在そのものの究明の必要性を見い出し，モホリ＝ナギーの‘biological なもの’について考察してきた。しかしその考察の結果，‘biological なもの’の理論的認識にデザインの統一的基盤を求めることの困難さを知った。というのは全体的人間の認識には，原理上到達困難な不十分性が伴うからである。それでもなお我々がデザインの最終的価値判定は生活者によってなされるという原則を認めるならば，求められるべきものはこの原理上

不十分にしか認識し得ない統一的基盤以外にはない。言い換えればデザインが全体的人間としての生活者にかかわろうとする限り，その統一的基盤は常に不十分にしか与えられないということである。

ところで全体的人間の認識における原理的不十分性は，全体的人間の根拠を他の領域に求められないということ，つまりたとえばデザインが自然科学的法則にその活動の客観的原理を要請することはできないということを示唆している。この示唆から先にも述べたように心理学上からも諸科学の統一が唱えられるのであるが，その場合でも統一のための原理を一つの基礎科学部門たとえば数学に求めることはできない。統一科学の樹立のためには，まずそれぞれの探究分野が自己の探究成果をみずから評価できなければならない。なぜならみずから評価できなければ，評価の基準は他に求められねばならず，そしてそれが不可能だからである。自己評価の基準は，今日の諸科学の状況を見るならば，科学の全領域の進展に同伴し得るような探究の継続的発展の可能性とまた全領域と共通項を持ち得る探究方法の普遍的共有性にあると言える。この二つの基準を各領域の探究そのものの内に確立すること，そして又同時に諸領域の間に相互作用的相関関係を実現することが，統一科学への途であり，さらに言えば全体的人間への途にほかならない。

デザインにおいても，それが現代の科学技術とその進歩に不可避的に関係するが故に，特に造形面にこのような二つの基準を確立することが現代の課題なのである。しかしこのような確立や造形の発展のための努力は，科学技術に対向するあるいは対応するという姿勢からだけでは生じてこない。デザインや造形はやはりそれ固有の努力の源泉を持たねばならない。この源泉こそまさに‘biological なもの’にほかならない。なぜなら‘biological なもの’は，その理論的認識の原理的不完全性の故に，実践的理念として我々のために与えられているものだからである。

— 註 —

(1) Moholy-Nagy: 「Constructivism and the Proletariat」=Excerts from an article in 「MA」, May, 1922. ……本文中の引用は, Sibyl Moholy-Nagy: 「Moholy-Nagy…Experiment in Totality」, P21より。

(2) 同上。P21

(3) Laszlo Moholy-Nagy: 「The New Vision 1928 and Abstract of an Artist」…Copyright, 1947 by George Wittenborn. P18

(4) 同上。P16

(5) 同上。P15

(6) 同上。P16－17

(7) Laszlo Moholy-Nagy: 「MALEREI FOTOGRAFIF FILM」…1967, Florian Kupferberg Verlag. seite 6

(8) Laszlo Moholy-Nagy: 「Vision in Motion」 1947, P11

(9) Laszlo Moholy-Nagy: 「The New Vision 1928 and Abstract of an Artist」…Copyright, 1947, by George Wittenborn. P32

(10) 佐々木徹郎訳「行動科学入門」1972, P 3

(11) Laszlo Moholy-Nagy: 「The New Vision 1928 and Abstract of an Artist」…Copyright, 1947, by George Wittenborn. P54

参 考 文 献

1. L. Moholy-Nagy: 「The New Vision 1928 and Abstract of an Artist」… Copyright, 1947, by George Wittenborn.
2. L. Moholy-Nagy: 「Vision in Motion」 1947.
3. L. Moholy-Nagy: 「MALEREI FOTOGRAFIE FILM」 1925…1967 Florian Kupferberg Verlag.
4. Sibyl Moholy-Nagy: 「Moholy-Nagy, Experiment in Totality」 1969.
5. 「Moholy-Nagy」 edited by Richard Kostelanetz 1970.
6. K. ゴールドシュタイン「生体の機能－心理学と生理学の間」(Der Aufbau des Organismus von Kurt Goldstein), 村上仁, 重丸正四郎訳, 1971, みすず書房
7. フォン・ベルタランフィ「生命－有機体論の考察」(「DAS BIOLOGISCHE WELTBILD・I, Die Stellung des Lebens in Natur und Wissenschaft

von Ludwig von Bertalanffy」1949）長野敬・飯島衛共訳，1974，みすず書房
8. メルロ＝ポンティー「行動の構造」(「LA STRUCTURE DU COMPORTENENT par Maurice Merleau-Ponty」1942）滝浦静雄・木田元訳，1971，みすず書房
9.「行動科学入門」(The Voice of America, FORUM LECTURES, Behavioral Science Series）佐々木徹郎訳，1967，誠信書房
11. P. ギョーム「ゲシュタルト心理学」(「LA PSYCHOLOGIE DE LA FORME par P. GUILLAUME」）八木冕訳，岩波現代叢書
11. Friedrich Dessauer:「Philosophie der Technik」, 1927.
12. Heinrich Beck:「Philosophie der Tecknik」1969.
13. ニコラス・ペブスナー「モダン・デザインの展開」(「PIONEERS OF MODERN DESIGN」1949）白石博三訳，みすず書房
14. 河本敦夫「現代造形の哲学」1973，岩崎美術社
15. 今田　恵「心理学史」1971，岩波書店
16. 相良守次編「現代心理学の諸学説」1971，岩波書店
17. 木田　元「現代哲学」1972，NHK市民大学叢書 9
18. 林　　進編「現代デザインを考える」1969，美術出版社
19. 嶋田　厚「デザインの哲学」1970，潮出版社
20. 中村禎里，里深文彦編「現代の科学・技術論」1972，三一書房
その他